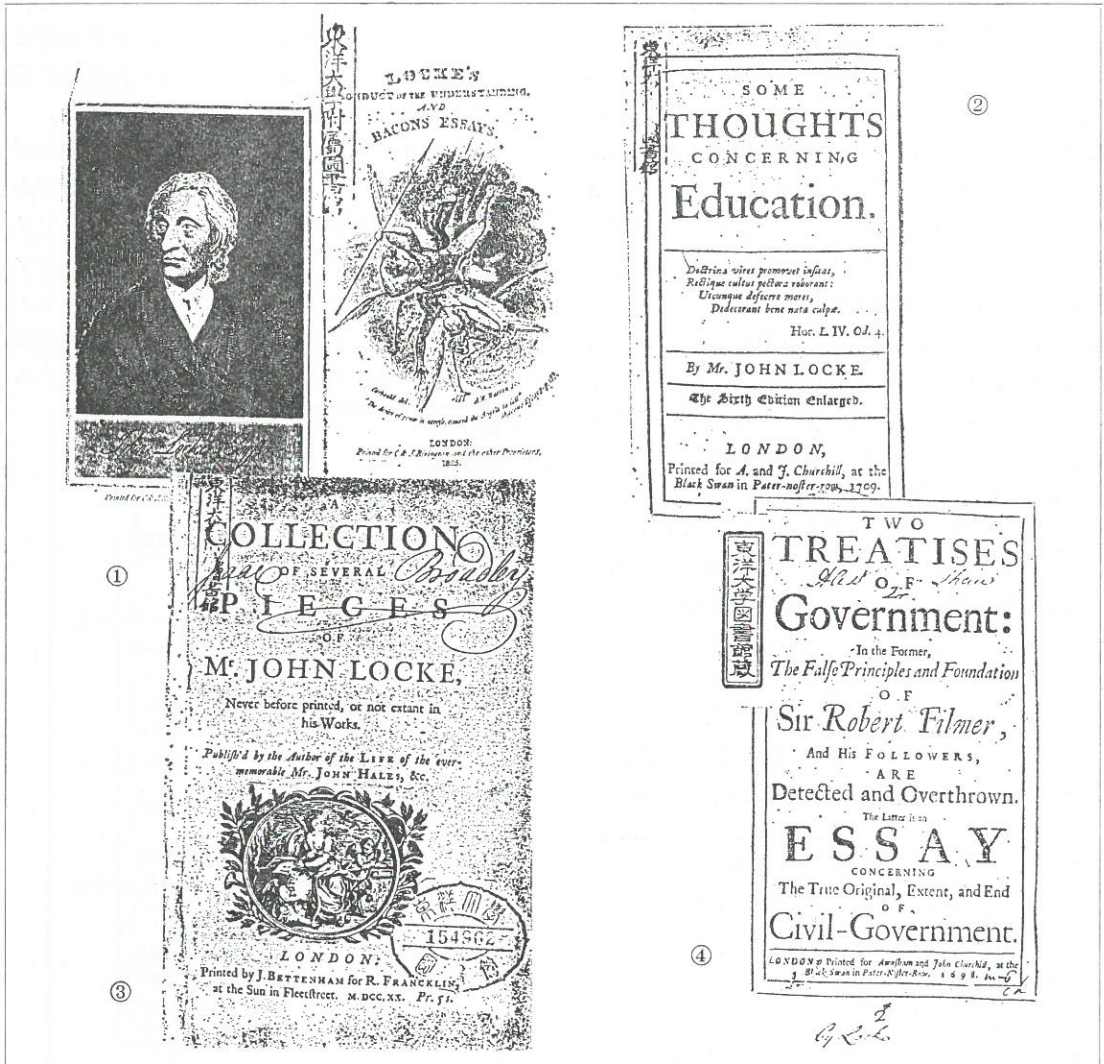


# ΚΟΣΜΟΣ

コスモス No. 80 1988 冬



※貴重書に指定されている、本学所蔵のジョン・ロックの著作（6ページ参照）

貴重書から

解題 ジョン・ロック  
『キリスト教の合理性』

— 聖書批評学の古典 —

平野 耿

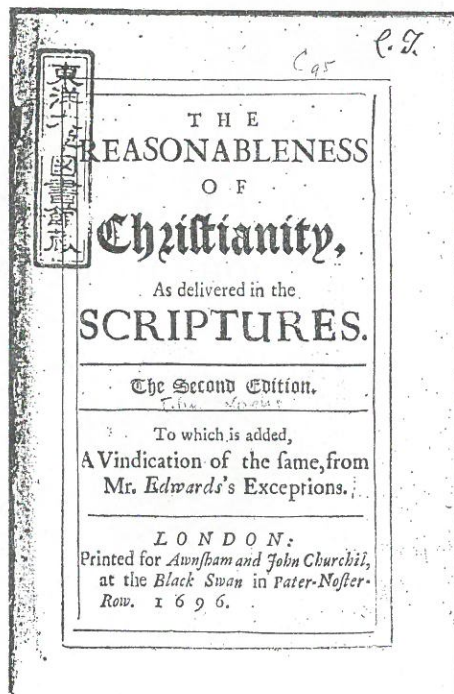
写真のタイトル・ページをごらんいただきたい。  
『聖書に述べられている キリスト教の合理性』という表題と、第2版・ロンドン・1696年刊の文字は読み取れるが、そこには肝心な著者の名が記されていない。政情が不安で、信教や言論の自由が今日ほど確立されていなかった当時のヨーロッパでは、匿名出版はさして珍しいことではなかった。多くの知識人が、身の危険を慮り、反響をみるために、自著の初版ではよくこの手を使ったからである。それにしてもこの本の著者は誰であろう。書誌学的クイズを解く鍵は、『エドワーズ氏の批難に応える同じ著者の弁明』なる小論が、本書に所収されているという記載にある。17世紀のイギリス思想史に詳しい人ならば、おそらく次のような宗教論争を思い出されるにちがいない。1695年8月12日に、本書の初版が匿名で出版されると、熱烈なカルヴァン派の聖職者ジョン・エドワーズ(John Edwards, 1637—1716)なる人物が、『無神論の若干の原因』を著わして本書を攻撃した。ただちに『弁明』が書かれ、その後3年にわたる論争が始まった。おかげで本書に寄せる関心も高まり、その年の暮にはこの第2版が世に出ることになったというわけである。(実際には1696年刊と記載)こうして初版には含まれていない『弁明』の追加により、著者の特定は反って容易となる。

ところで著者探しの糸口は、本書の版元からたぐることも可能である。17世紀末のロンドンで、書籍商と発行者を兼ねていたブラック・スワン堂のチャーチル兄弟は、ある有名な思想家の匿名著作の出版によって、歴史に名を留めているからである。例えば、近代民主主義思想の祖型となった『政府二論』(1689)、政教分離と信教の自由を説

いた『寛容についての書簡』の英訳版(1689)、また特異な教育論として知られる『教育に関する若干の考察』(1693)など不朽の名著が、いずれもこの書店から、はじめは匿名で世に問われたのである。ここまで言えばもうおわかりのはず、その人の名はジョン・ロック(John Locke, 1632—1704)、<天才の世紀>を代表する偉大な思想家である。

彼はジェームズ1世の治政下、ブリストルに近いリントンで生まれた。両親の家系は、ともに厳格なピューリタンで、いわゆる Gentry 階層の出身である。生家の信仰から、彼もまたピューリタンだったと考える人々が意外と多い。しかしロック個人は、終生慎み深い国教会の一員であった。彼は、エドワーズが非難するように、無神論者に手を貸す輩でもなければ、三位一体や人間の原罪を否定するソキヌス派でもなかったのである。

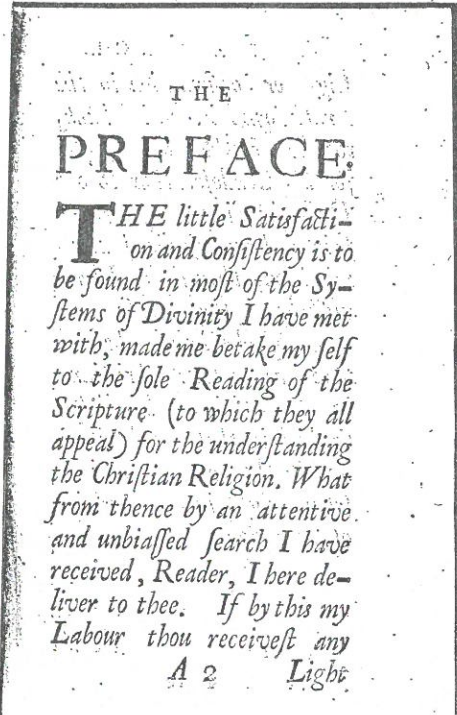
長じて彼はクロムウエル政権支配下の Oxford 大学に進み、哲学、神学、医学、新科学を学んだ。折しも科学革命の最中である。伝統的なアリストテレス・スコラ学を学んで、母校のギリシヤ語や修辞学の講師を務めるかたわら、ロバート・ボイル(Robert Boyle, 1627—1691)の指導で医学や化学の実験を進め、当代一の臨床医シドナム



(Thomas Sydenham, 1624—1689)と診療を共にしながら、天然痘の症因を探るといふ、新旧両面の顔が彼にはあった。ただし、彼の研究生活は決して平穩なものではなかった。庇護者シャフツベリ伯を援けて、70年代以降は激しい政争に巻き込まれ、83年から5年半に及ぶオランダへの亡命を余儀なくされたからである。しかしこの間蓄積され熟成された彼の思想は、名誉革命の完成を待って一気に開花する。『人間知性論』(1690)もそのひとつである。一切の生得的な原理や観念を否定した後、感覚と理性の協同作用に基づく新しい認識原理を主張したこの著作は、たんに古典経験論の聖書として讃えられただけでなく、今日でも辿り直されねばならない認識批判の原点なのである。

波瀾に富んだロックの生涯も、晩年は宗教的思考に傾斜して静謐なものとなった。既に述べたように、彼は自然世界の探索に打ち込む一方、有限で可謬的な人間の知的能力に早くから限界を知って、被造物の窮極原因である神の存在を確信していた。そして救済の教理の理性による把握を求めて、もっぱら聖書研究に力を注ぐのである。『奇跡論』(1704)や、未完となった『パウロ書簡の註釈』に先立って書かれた本書は、彼が生涯を通じて追い求めた<道德の根拠としての神の認識問題>を、聖書の章節に照らして吟味し明らかにしようとする、いわば近世における聖書批評学の先駆ともいべき古典なのである。

さてここで、もう一枚の本書序文の写真を見ていただきたい。そこにはこう書かれている。「私は、いままでに出逢った諸神学体系については、ほとんど満足も一貫性も見付けることができなかったので、キリスト教を理解するために、(それら神学体系はすべて、これを引きあいに出しているのであるが)聖書を自分自身ですっかり読むことにした。注意深くまた偏見を持たずに研究した、聖書研究から私が得たものを、読者よ、あなたにいま述べるのである。このような私の努力によって、もしあなたがながしかの光明か、真理に対する確信を得られるなら、私とともに光の父に、吾々の理解を許してくれたことに対して感謝して下さい。もし公平に、偏見も持たずに吟味し



て、私が福音書の意味と趣旨を誤解していることが判れば、真のキリスト教徒として、福音書の精神(それは博愛の精神である)によって、また真面目な言葉で、救済の教理に関して、どうか私を正して下さい。」(服部知文・訳)

では、ロックが綿密な聖書研究から得たものはなんであったろうか。いま筆者がそれを要約することは余りにも空しい。やはり直接原典にふれることが大切である。幸い上掲の序文に始まる服部知文氏のすぐれた邦訳『キリスト教の合理性・奇跡論』(国文社、1980)がある。専門的には、田中正司・平野 耿責任編集『ジョン・ロック研究』(御茶の水書房、1980)所収の同氏論文「ジョン・ロックと宗教」その他を参照されれば幸いである。

ところで、本学図書館が所蔵するものは、元文学部長、龍山義亮先生より遺贈された「龍山文庫」に含まれる第2版で、17 cm × 10 cm の茶色革表紙本。関西学院大学のロック・コレクション、一橋大学のバート・フランクリン文庫、名古屋大学のホプス・コレクションその他に含まれる初版、第2版と並んで、わが国に現存する貴重書のひとつである。

(工学部教養課程教授 ひらの・あきら)

## 《研究余滴》

## 向学心の原点

劔持通夫

私は各大学の教壇に立って速くも37年の歳月が流れて行った。その間、数大学で工業経済及び演習を担当し現在に至っている。終戦直後の当時は占領下で追放令があり、教育界においても戦前にファシズムと統制経済に協力した学者達は漏れなく大学から追放され教員資格を剥奪された時代であったが、新たに大学教員となる者も勅令 263号に基づき占領軍総司令部と文部省の両者による大学教員適格審査委員会の審査をうける必要があった。私は戦前に書いた物価政策の論文と戦争直後に書いた鉄鋼業の史的分析の論文の二点を委員会に提出して審査をうけたのであるが、審決で大学教員適格の判定書となった。戦前の論文は私が大学経済学部1年生の在学時代に書いたものであった。それは当時日米戦争に突入する直前の秋頃であるが、商工省物価局長官が主催し、中央物価協力会議々長が協賛した日本政府による物価政策の公開懸賞論文の募集が行われた。応募者の大部分は大学教授、民間研究所の研究員などで提出論文は1万点を越えたといわれる。私も「鉄鋼価格政策の進路」という題名で応募し、偶然にも主席で当選し長官賞と多額な賞金を長官室に招かれて当時の菱沼長官より直接に受賞した。その論旨は日本の鉄鋼生産力を独自の計算で測定し、生産力の低下と悪性インフレが、やがて日本経済を崩壊する方向にあることを明確に分析したものであった。受賞者5名の氏名は当時五大新聞に発表され、論文は当時の総合雑誌に掲載されて行ったが、何故か、私の論文内容は公開されなかった。その後大学を卒業し、直ちに現役召集をうけ、程なく中国大陸に出征した。あとで判ったことであるが反戦主義者の要注意人物として生還をみない前線への行路にあった。たまたま、行軍中の大陸の列車のなかで上官から「中央公論」誌を渡され私の論文が公開されたことを知った。全文にわたって主要箇所は伏字で数字は削除され、全く文意不明であった。

(6ページに続く)

## 《研究余滴》

## 今昔研究物語

三和一博

今は昔の話——その頃(というのは私が研究生生活に入った昭和30年代初期)、私はよく図書館へ通った。とくに法務省の図書館へは指導教授の紹介状をもらってよく通った(貸出しはしてもらえなかった)。興味あるテーマ(テーマを見つけること自体が一つの課題でもあった)の文献を読んでノートにとった。各章各節毎に要約をとり、必要部分は写した。こんなノートが幾冊もたまっていった。このようにして勉強し、原稿にまとめる際にも、このノートは大いに役立った。

最近ではこのようなノートなしに原稿を書くため苦労している。必要な文献はコピーにとれるし、書く要領も少しはうまくなったが、コピーはノートとは根本的に違うからである。

それだけではない。最近では学説や判例を分類し要約した便利な本が数多く出ている。何の苦労もせずに分類や要約が可能になっている。しかし、分類は要するに一つの分類にすぎず、自分なりに分類することによってはじめて問題点をつかめるし、違った見方も可能となる。また、要約だけでは表面的な意味しかわからない。表面的には対立ないし相反する学説や判例でも、底流には共通性があったりして、どこに問題があるのかの本質をとらえることこそが必要である。このようにしてこそ、ローマ法以来の法律理論を現代の最先端の問題に適用することが可能となる。最近では、従来の考え方を見直すことによって、新しい理論を探っていく、考え方の流れをつかむことが重要となっている。そのためには、既存の文献をしっかりと読みとることが前提となる。

高度情報化社会を迎え、学術情報交流は今後ますます重要となり、そのための技術は進歩し便利になっていくであろうが、それを使いこなすためには、地味な努力を重ねることによって、物の本質をつかむ方法を身につけることこそ重要である。それこそが大学教育の使命であろう。

(朝霞分館長 みわ・かずひろ)

## なるほど ザ・ハイテク (5)

新しい計算システム  
について

青柳 宣生

高度情報化社会では、大容量で複雑な情報を高速でしかも低廉に処理できる高性能な計算機の開発が期待されている。しかし今日使用されているデジタル計算機の基本原理はチューリングマシンであって、指定したアルゴリズムに従って計算可能函数を計算しているにすぎず、その構造は、30年以上前に John von Neumann によって考案されたプログラム内蔵方式以来、ほとんど変化していない。この中央処理装置—記憶装置間のリンクは、一つのプログラムの複数の部分を並列的に取り扱える時でさえ、直列的な操作を必要とする。また情報と情報から別の新しい情報を生み出すことはできないという点に本質的な問題点がある。そこで多数のデータから帰納的に共通の意味や法則を単なる機械的な組み合わせとは全く別の計算方法によって抽出できるアナログ的な要素を含んだ超並列的な演算能力を有する新しいアーキテクチャの計算機として「光コンピュータ」や「バイオコンピュータ」の研究が注目されつつある。

光コンピュータは光固有の高速性と大規模な空間的並列処理特性を生かした時・空4次元的な制御の可能なシステムである。光演算の方式としては、現在次の3つが考えられている。(1)時系列演算方式……これは光論理素子を用いた von Neumann型のアーキテクチャの計算機である。

(2)並列アナログ演算方式……これは主に光学的空間周波数フィルタリング技術に基づき、2次元または3次元データを並列的に処理する光演算方式である。(3)並列デジタル演算方式……これ並列光論理演算素子や並列光フリップフロップなどを用いて並列光論理・算術演算する方式である。これら3方式の特徴を融合したハイブリット型の並列光コンピュータも考えられる。光計

算機の開発の最も重要な鍵は新しい光論理素子の開発にある。

バイオコンピュータはバイオテクノロジーとエレクトロニクス技術を融合したもので、脳細胞に当たる素子と脳神経に相当する多数の信号伝達路でネットワーク状に形成しあうものである。それには、従来の計算機にない次のような特徴を持たせようとしている。(1)学習に基づき知識を自発的に獲得、更新する。(2)推論により自らプログラミングする。(3)曖昧な情報、複雑な情勢に柔軟に対応する。

計算機の機能をさらに進化させるためには生物の組織や記憶のメカニズムに関する研究が不可欠であるという認識は、これまでも計算機の歴史に影響を与えてきたが、1982年カリフォルニア工科大学の物理学者 J. J. Hopfield は LSI 化が可能なアナログ回路として、学習能力は演算処理装置の数ではなく結合点の数に影響されるという考え方に基づき、神経細胞の内部構造までは立ち入ることなく、単なる結節点ノードとして、ノード間の結線状態と、結線上における信号伝達の重みにのみ注目したニューロコンピュータ(バイオコンピュータの一種)をモデル化し、連想メモリなどへの応用を考えて以来、急速に開発機運が盛り上がり、「人工知能」ブームにとって代わろうとしている。開発の決め手は、これまでのような集積度をあげることを主目的とした LSI とは異なった発想法で設計したアナログで動作する超 LSI をいかにつくり上げるかにかかっている。このようなハードウェアの開発のほかにも、光素子を用いて神経細胞に相当するネットワークを構築する実験なども進められている。

さらに神経細胞内部の物理化学現象に注目して、その機構から得られた知見を基に、計算機上に、シミュレーションモデルを構築するモルキュラー・コンピューティングなるものも登場してきている。いずれにしてもバイオコンピュータは原則として現在の von Neumann 型のような基本ソフト(OS)は必要としない。

以上に述べたような自然界の事象に範をおいた並列処理と、従来からの記号処理・論理処理の2つの道が統合できた時に、新しい情報処理の理論が生まれ、新たな情報処理技術の展望が開けることになろう。

(工学部教授 あおやぎ・のぶお)

\*\*\* 文献ガイド \*\*\*

- 1) 光コンピュータ 稲葉文男編 オーム社 1985
- 2) 光情報処理の歩み 辻内順平 応用物理 51巻5号 pp.543-545 1982
- 3) 光コンピュータ 谷田貝豊彦 光学 14巻1号 pp.2-10 1985
- 4) Special issue on Optical Computing. Proc. IEEE Vol. 72 No. 7 1984
- 5) Digital Optical Computing. Proc. SPIE Vol. 752 1987
- 6) 特集=近未来コンピュータへの「道」 Computer Today No. 18 1987
- 7) 神経回路網の数理 甘利俊一 産業図書 1978
- 8) アソシアトロン 中野馨 昭晃堂 1979
- 9) Perceptron. Minsky, M., Papert, S. MIT press 1971
- 10) バイオコンピュータ 甘利俊一 岩波書店 1986

図書館 あ・ら・かると

★「東洋大学工学部 雑誌目録 1987」が、発行されました★

工学部の新しい雑誌目録が、工学部分館から発行されました。(昭和62.11.23)

昭和49年(1974)に初版が、昭和52年(1976)に改訂版を出した後をつぐもので、しっかりとした出来栄です。

初版はまったくの手作りで、“最少の経費で、大きな効果をあげた”典型でしたが、広いキャンパスの研究室などにも点在する雑誌も一冊で見つけられる合同目録の性格が好評だったものです。

今回も基本的な構成は初版を踏襲し、和文雑誌編、欧文雑誌編、露文・華韓雑誌編の三区別のなかで誌名のアルファベット順排列になっています。

(4ページから続く)

その時の人間の置かれた条件への諦めと怒りの交錯した心境とが、その後の私の向学心の背骨となったかも知れないのである。私のように真実の探求が死につながるかも知れない暗夜行路を経験したものにとっては学問研究の自由とは至上の宝である。

(図書館長 けんもち・みちお)

★お知らせ★

春休み期間中の図書館貸出について

白山図書館

貸出期間：2月5日(金)～3月31日(木)  
貸出冊数：一般図書5冊。録音テープ5点。  
返却期限：4月11日(月)～4月14日(木)  
※卒業予定者は2月29日(月)まで。

工学部分館

貸出期間：2月1日(月)～3月19日(土)  
貸出冊数：一般図書5冊。語学テープ3点。  
返却期限：4月11日(月)～14日(木)  
※卒業予定者は2月27日(土)まで。

朝霞分館

貸出期間：2月24日(水)～3月4日(金)  
貸出冊数：一般図書5冊。  
返却日：3月5日(土)  
詳細は、各館の案内を御覧下さい。

表紙説明

本学所蔵のジョン・ロック著作中、貴重書に指定されているのは5点ある。

今回、解題の対象となった外のものの書影をここに集めてみた。

- ①ロックの肖像画が掲載されている The conduct of the understanding by John Locke... (K133.25 : L J : 18)
- ②「教育に関する若干の考察」(K371.1 : L J) コスモス, No.69 参照。
- ③ A collection of several pieces of Mr. John Locke (K133.25 : L J : 17)
- ④「政府二論」(K133.25 : L J : 17) コスモス, No.65 参照。